

# うるま野菜朝市 人気

## 健康福祉センター31日まで

### 食材ごとに調理法も紹介

【うるま】市健康福祉センターうるま1階で6月から開催中の「うるま産直野菜朝市」が好評だ。平日の午前9時から午後1時までの営業で、うるま市を中心に登録された80農家が出品した約50種類の新鮮な野菜や卵、お菓子などが並ぶ。今月31日までの期間限定の朝市は、地産地消の啓発のほか、今年秋に市前原に開所予定の農水産業振興戦略拠点施設「うるまマルシェ」の宣伝にも一役買っている。

(中部報道部・大城志織)

8日、開店前の午前8時。カボチャやオクラなどの納品に訪れた銘苅清孝さん(68)市赤道IIは、大阪で土木関係の仕事をした約40年間務めた後、2016年に地元へ戻って農業を始めた。「朝市での販売は農家にとって励みになる。無農家で新鮮な野菜を提供したい」と目を細めた。うるまマルシェでも野菜を出荷する予定だ。

開店直後から施設の利用者や買い物客らが足を運び、新鮮な野菜を手にとるなど熱心に選んでいた。朝市職員石川美幸さんは、客にお勧めの野菜や調理方法を紹介している。「農家さんから納品の時においしい食べ方を聞き、お客さんにも会話をしながら伝えていく。だんだん顔見知りのお客さんも増えてきている」と語った。



育てたカボチャを手に「新鮮な野菜をみんなに提供したい」と意気込む銘苅清孝さん=8日、うるま市健康福祉センターうるま

施設のプールを利用する際、朝市に立ち寄るという上原時子さん(市平良川II)は「取れたての新鮮な野菜が買えるのはとても良いね」と笑顔。名護市から訪れた石嶺節子さん(65)は「朝市にはうるま市での用事ついでにいつも寄っている。黄金華など特産品が買えてうれしい。うるまマルシェにも行ってみたい」と話した。

うるまマルシェでは、うるま市のほか近隣市町村合わせて約500農家が登録している。指定管理は、地域密着型でまちづくりに取り組み一般社団法人フロモーションうるま(中村薫代表理事)と栃木県宇都宮市で道の駅を運営す

るファーマーズ・フォレスト(松本謙代表取締役)の2社でつくる「うるま未来プロジェクト」が担う。中村代表理事はうるまマルシェについて「食べ物や工芸品などうるま市の『いいね!』と言われるものが全て集まり、市内外の方が楽しめる施設にしていきたい」と語った。